

IV-2 智恩寺所蔵鏡の調査

馬淵 一輝

1. はじめに

京都府宮津市に所在する智恩寺には複数の考古資料が所蔵されており、そのうちの単鳳環頭は本書IV-1で関連資料とともに詳細に位置づけられている。環頭の調査時に、古墳時代の銅鏡も所蔵していることが判明し、筆者のもとに報告の依頼があった。2024年4月26日に調査の機会をえたので、ここに成果を報告する。

2. 概要

智恩寺には計18点の考古資料および古器物が所蔵されている(表1)。以下では、京都府立丹後郷土資料館(ふるさとミュージアム丹後)が事前調査で付した資料番号に基づき、記述を進める。

資料のうち番号02～14の13点が銅鏡であり、古墳時代にかかわるものは番号02・03の2面である。前者は後期倭鏡の乳脚紋鏡系と呼ばれる系列であり、後者は類例の少ない中期倭鏡に分類される。これらの智恩寺所蔵古墳関連鏡は、古い郷土誌にしか紹介されていない。かつ、写真も小さく、後者1面とその他銅鏡5面しか公表されなかった(興謝郡役所編1972(初出1923))、あまり存在が周知されていない資料といえる。なお、この報告では「智恩寺の實物として和漢の古鏡十餘個を蔵す」と記されており、1923年の時点で、既に現存の所蔵品がそろっていたと考えられる。

また、これまで弥生・古墳時代の銅鏡の集成は何度か行われてきたが、先述の理由のためか、智恩寺所蔵鏡はいずれにも掲載されていない(白石・設楽1994、下垣2016など)。本稿では

表1 智恩寺所蔵考古資料一覧

番号	名称	時代	面径 (cm)
01	単鳳環頭	古墳後期	—
02	乳脚紋鏡	古墳後期	7.1
03	四獣鏡	古墳中期	11.5
04	虺龍紋鏡	明清	11.8
05	八仙鏡	明清	23.4
06	四獣鏡	清	9.5
07	桔梗蓬萊紋鏡	江戸	12.5
08	籬菊花双鳥紋鏡	鎌倉	10.8
09	瑞花双鳥紋鏡	平安～鎌倉	10.7
10	瑞花双鳥紋八稜鏡	平安～鎌倉	11.3
11	花卉紋鏡	—	6.5
12	州浜秋草鳥蝶紋鏡	鎌倉	8.5
13	瑞花双鳥紋八稜鏡	平安～鎌倉	8.9
14	瑞花双鳥紋八稜鏡	平安～鎌倉	9.5
15	奇石	—	—
16	奇石	—	—
17	銅鈴	平安以降	—
18	木球	—	—

古墳時代に関わる2面の鏡を主な対象とし、事実報告と最新の研究を参照した位置づけをおこなう。

3. 乳脚紋鏡（番号02、図1・2）

現状 完形品。2か所に亀裂が入っている。赤色顔料や有機質などの付着物は観察できない。紋様の凹部や縁には、粒子の細かな土がわずかに付着している。錆のため地金は確認できない。鈍い暗緑色の膜状の錆が表面全体を覆い、一部には緑錆も確認できる。背面や縁端では、表面が層状に剥離する。

法量 面径7.1cm、重量26.2gである。内区の厚さは0.5～1mm、外区の厚さは1～1.5mmである。反りは1.5mmである。

紋様・形態 低くならかな鈕で、鏡体と接する位置に段をもたない。鈕孔は横長の長方形で、底面は鏡体に接する。鈕から2mmほど離れた位置に突線がめぐる。

内区は7つの乳脚紋を左回りに配す。小乳の周りに逆U字形の突線がめぐり、間に短線2条を充填する。写真2～3時方向の一か所のみ短線が1条となる。乳脚紋同士の間隔はいずれも広めに設けられており、均等ではない。

内区外周は内に縦長の「工」字形1つと「王」字形4つを置いた擬銘帯がめぐり、外に櫛歯紋がめぐる。櫛歯紋は厳密に並行せず、方向が乱れて2本の線が「V」字形に交わってしまう部分が5カ所ほど存在する。内区と外区の境に段差はない。

縁は紋様をもたず、上面はわずかに反る。縁端は全体的に角がとれ丸みを帯びた印象を受けるものの、一部に鋭利な部分も認められる。

鑄造・研磨 鑄崩れは認められないが、縁端面に鑄巣による極小のピットが目立つ。写真6時の方向の縁が薄くなっており、鈕孔方向とも一致することから、この位置に湯口が設けられていた可能性が高い。

縁の明瞭な線状痕は後世の土や錆落としによるものと考えられる。櫛歯紋の模糊としている部分は鑄造か研磨によるものかは区別できない。鈕孔は右斜め上方向に開いて光沢をもち、紐ずれが発生していると考えられる。

位置づけ 主紋様から乳脚紋鏡系と判断でき、後期倭鏡に位置づけられる。間隔が広い主紋様、低い鈕、薄い鏡体などをもとに、加藤一郎氏による編年を参照すると乳脚紋鏡A系のd式新相型式（乳脚紋鏡系4段階）に位置づけられ、TK47型式期（6世紀初頭）の製作年代を想定する（加藤2020）。

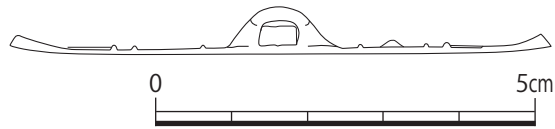


図1 智恩寺所蔵乳脚紋鏡 写真・実測図 (S=1/1)



図2 智恩寺所蔵乳脚紋鏡 三次元計測図 (S=1/1)

4. 四獣鏡 (番号 03、図3・4)

現状 外区が一部欠損しており、その周辺は鏡面側に向かって湾曲している。紋様の凹部に薄く赤色顔料を確認できる。獣毛のような白色で短い繊維質が付着しているが、出土時のものかは判断できない。銹のため地金は確認できない。全体を明るい薄緑色の銹が覆う。外区や鈕の表面の大部分に層状剥離を顕著に確認できるが、現状では安定している。暗色で粗い鑄肌の

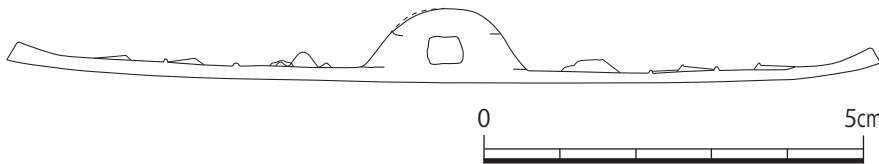


図3 智恩寺所蔵四獣鏡 写真・実測図 (S=1/1)

ように見える範囲は、いずれも表面が脱落した下に見えているものである。

法量 面径 11.5cm、重量 166.5g である。内区の厚さは 1.5mm、外区の厚さは 2～3mm である。反りは 3mm である。

紋様 半球形の鈕で、鏡体と接する位置に段をもたず、鈕座紋様もない。

内区は円圏をもった小乳によって 4 区画されているが、等間隔ではなく正確に割付されていない。獣像は胸と腰が高く突出した体躯をもち、相対的に顔と頸が華奢にみえる。口や爪などの細部の表現は省略されている。獣像と乳の周りには曲線や短直線を充填しており、それぞれの区画で異なる紋様を配す。内区外周は間隔の広い櫛歯紋がめぐる。内区と外区の境に段差はほぼないが、後述するように鋸歯紋の内側が部分的に突出するため、段がつくように見える箇所もある。

外区は内側から外側へ鋸歯紋、2 条の複線波紋、鋸歯紋を配し、いわゆる鋸波鋸紋と呼ばれる紋様構成をとる。最外周の鋸歯紋は間隔が広い。写真右側は鋸歯紋の内側が突出する。複線波紋の突線はほとんど連続しおらず、ぶつ切りになっている。一部は弧線となり、弧の内側が



図4 智恩寺所蔵四獣鏡 三次元計測図 (S=1/1)

浮彫になっている箇所も複数ある。

縁は紋様をもたず、上面の反りが顕著である。状態が悪いためはっきりと確認できないが、縁端は鋭利に鋳出されている。

鋳造・研磨 鋳崩れなどの欠陥は確認できず、鋳造に関する情報は見出しがたい。研磨も同様で、突出する部分に光沢を確認できるが、当時のものかは不明である。鈕や縁の剥離した部分にも確認できることから、後世の手擦れである可能性が高い。

位置づけ 紋様は後期倭鏡の巡回式獣像鏡系に似るが、乳をもつ点は大きく異なるため、ここでは中期倭鏡の四獣鏡系と判断した。類例は、管見の限りでは長野県兼清塚古墳しか見つけられなかった。この鏡は加藤氏によって中期倭鏡の近内4号墳出土鏡関連鏡群に含められ、製作年代にON46～TK208型式期（5世紀第3四半期）が想定されている（加藤2021）。本鏡も同じ時期に製作されたと考える。

5. その他の銅鏡（番号04～14、図5・6）

番号04・06は、一見すると古墳関係資料と評価できる鏡だが、今回の調査の結果、鈕孔周辺の鏡体の崩れ、赤みがあった銅質、ずっしりとした重さなどから中国の明清時代以降の仿古鏡と判断した。番号05も同時期の鏡と考える。番号06は中国風の漆箱に収まる。番号11

は中国鏡と考えられるが、詳細な時期は分からない。

番号 07～10・12～14 はいわゆる和鏡と呼ばれる日本の中近世の銅鏡で、平安～江戸時代のものが多いと判断したが、番号 13・14 の鑄上りや銅質をふまえると少なからず後世の踏み返し鏡も含まれていると考える。なお、和鏡には鏡面に神仏を線刻したもの（番号 08・12）や、柱などに懸けるために穿孔したもの（番号 12）も存在し、これらは懸仏や社寺奉納鏡であったと考えられる。かつて智恩寺周辺には小さな分社が点在していたとされており、合祀の際に招来された可能性もあるだろう。

6. おわりに

以上、智恩寺が所蔵する古墳時代倭鏡を中心に記述を進めてきた。いずれも来歴の分からない資料であり、ご住職への聞き取り調査（本書Ⅳ-1 参照）のように遠方からもたらされた可能性も排除しきれない。種類も多岐にわたるため、丹後地域と結び付けて理解することは難しい。しかし、本報告で所蔵鏡を整理したことによって、古墳時代倭鏡を明確にしたことや、中期倭鏡のような類例の少ない鏡の存在を指摘できたことは成果といえるだろう。

参考文献

- 加藤一郎 2020 『古墳時代後期倭鏡考 雄略朝から継体朝の鏡生産』六一書房
加藤一郎 2021 『倭王権の考古学 古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学出版部
下垣仁志 2016 『日本列島出土鏡集成』同成社
白石太郎・設楽博己（編）1994 「弥生・古墳時代出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
與謝郡役所（編）1972 『與謝郡誌』下巻 名著出版（京都府與謝郡（編）1923 『京都府與謝郡誌』下巻）

図版出典

- 図1・3：筆者撮影・作図
図2・4：初村武寛氏作成
図5・6：04・06：栗山雅夫氏撮影 05・07～14：筆者撮影
表1：筆者作成

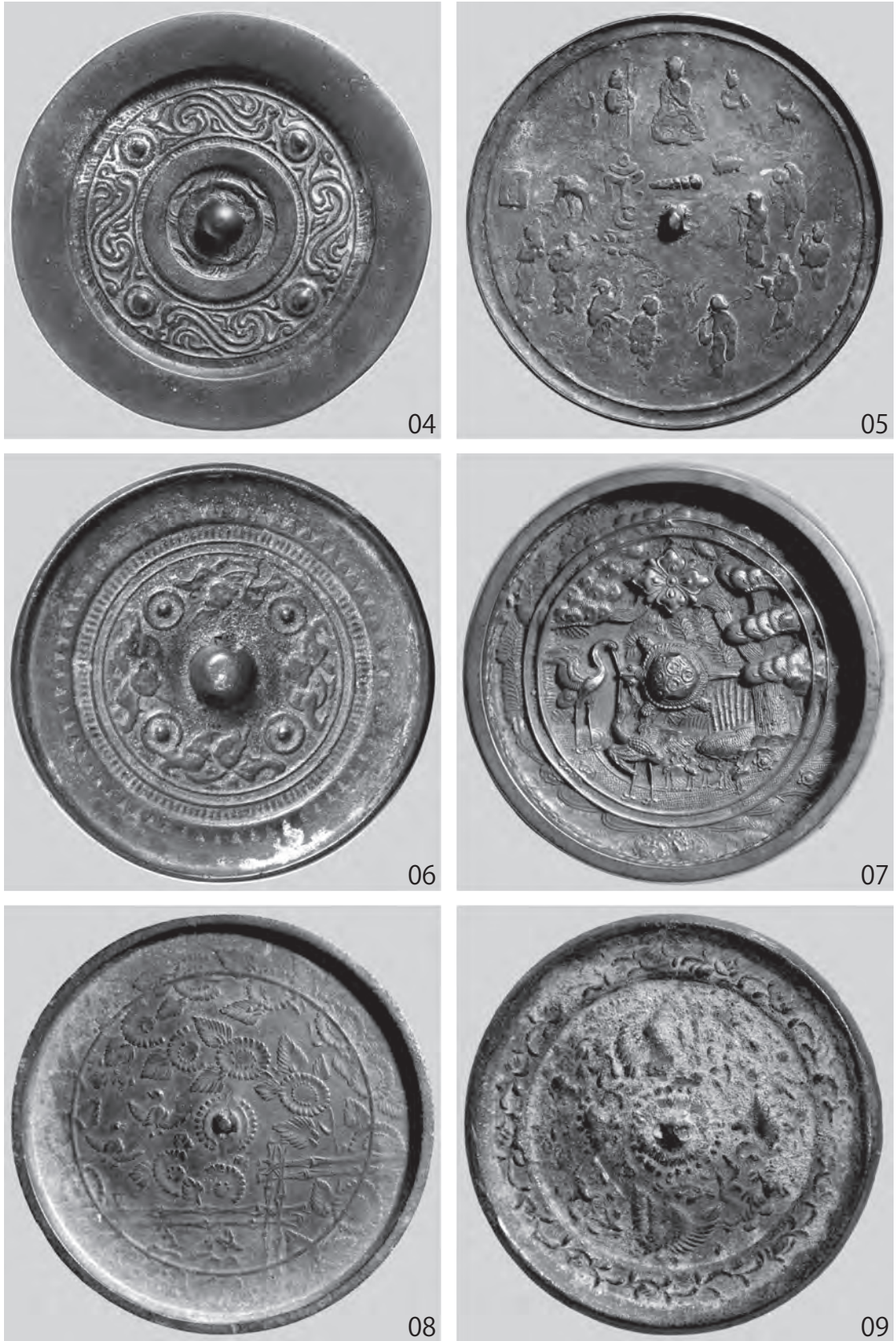


図5 智恩寺所蔵鏡一覧(1) (縮尺不同、番号は表1と対応)



10



11



12



13



14

図6 智恩寺所蔵鏡一覧(2) (縮尺不同、番号は表1と対応)

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2